

石見国分寺跡第 I 期調査概報

— 昭和60年度～昭和63年度 —

平成元年3月

浜田市教育委員会



1. 銅造誕生釈迦仏立像

序

石見国分寺は、天平13年、聖武天皇により国分寺は国の華であり、寺は必ず好处を選んで建てるといふ詔勅が出され、浜田市国分町の地に開山されました。この周辺には国分尼寺跡、下府庵寺跡をはじめ石見国庁なども所在しており、古来より文化的香り豊かな地となっております。

今回の調査で特筆すべきものは、国分寺跡からの誕生釈迦仏立像の出土という大きな成果が得られましたことでもあります。

また、奇しくも本年は旧国府町との合併20周年にあたり、この時に文化と歴史の豊かな地よりこのような貴重な遺物が出上りましたことは、偶然とは言い難いものを感じます。今回の出土品も浜田市の社会教育にとって必ずや役立つものと信じております。

最後に、今回の発掘調査で仏像鑑定をして頂きました奈良国立博物館仏教美術研究室長の光森正士先生、調査指導をして頂きました島根大学名誉教授の山本清先生・島根県教育委員会文化課、調査を担当して頂いた桑原韶一先生・的場幸雄先生のご指導ご援助のたまものでもあります。また、調査に御理解と御協力を頂いた地権者・地元国分町の皆様方に心から感謝を申し上げる次第であります。

平成元年3月

浜田市教育委員会

教育長 半田 淨

例 言

1. 本書は浜田市教育委員会が昭和61・63年度に国庫・県費の補助を得て実施した石見国分寺跡の寺域確認調査の概要報告である。
2. 本書では昭和60年度に実施された金蔵寺の現状変更に伴う発掘調査の成果についても含めることとした。
3. 調査を実施するにあたって、金蔵寺住職朝枝実彬氏をはじめ地権者の胎田一英、伊藤毅、上野一雄、小松亀竜、高見東一郎、田中敏夫、平畑重博の各氏並びに地元国分地区の方々に多大な御協力を頂いた。
4. 3年間に及ぶ調査については県内外の方々に御助言をいただいている。記して感謝の意を表わしたい。また、宮本徳昭（島根県文化財保護指導員）、卜部吉博（島根県文化課）、松本岩雄（同）、間野太丞（島根大学学生）の各氏には調査に御協力頂いた。
5. 昭和63年度調査で出土した誕生釈迦仏については、光森正士（奈良国立博物館）、沢田正昭（奈良国立文化財研究所）、肥塚隆保（同）、馬淵久夫（東京国立文化財研究所）、的野克之（島根県立博物館）、柳浦俊（島根県教育文化財団）の各氏に御協力・御助言を頂いている。
6. 本書の作成には桑原一郎、江川幸子（旧姓川口）、卜部吉博、林健亮、斗光秀基、山本博、椋木庸子の各氏に御協力を頂いた。
7. 本書の執筆は川口『史跡石見国分寺跡現状変更（発掘調査）終了報告書』（浜田市教育委員会）、卜部「石見国分寺跡発掘調査概報」（『季刊文化財』第58号）の調査報告をもとに原裕司がおこなった。また、V-3は光森氏の所見を原がまとめた。

目 次

I	はじめに	1
	1. 調査に至る経緯	1
	2. 調査体制	1
II	位置と歴史的環境	3
III	石見国分寺跡の概要	7
IV	調査の概要	8
V	出土遺物について	21
	1. 瓦類	21
	2. 土器類	26
	3. 銅造誕生釈迦仏立像	29
VI	ま と め	30

插 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡位置図	3
第 2 図	石見国分寺跡周辺図	4
第 3 図	石見国分寺瓦窯跡	6
第 4 図	第 1 調査区溝断面図	8
第 5 図	石見国分寺跡調査位置図	9~10
第 6 図	塔跡実測図	11~12
第 7 図	第 12 調査区道構実測図	14
第 8 図	第 9・10・11 調査区遺構実測図	17~18
第 9 図	第 5・18 調査区道構実測図	19~20
第 10 図	軒丸瓦実測図	22
第 11 図	軒平瓦実測図	23
第 12 図	丸瓦実測図	24
第 13 図	平瓦実測図	25
第 14 図	土器実測図 (1)	27
第 15 図	土器実測図 (2)	28
第 16 図	銅造誕生釈迦仏立像実測図	29

図 版

図版 1 銅造誕生釈迦仏立像

図版 2 1. 石見国分寺跡の航空写真(北西から)

2. 塔跡近影

図版 3 1. 塔跡西縁(第 1 調査区)

2. 塔跡北縁(第 3 調査区)

図版 4 1. 第 9 調査区

2. 第 10 調査区

図版 5 1. 第 11 調査区

2. 第 12 調査区

図版 6 1. 溝状道構(第 12 調査区)

2. 銅造誕生釈迦仏立像

図版 7 軒丸瓦・軒平瓦

図版 8 丸瓦・平瓦

図版 9 土器

I はじめに

1. 調査に至る経緯

石見国分寺跡は浄土真宗松林山金蔵寺の境内を中心としたもので、境内の南東限に塔跡と推定される土壇が知られるだけであり、金蔵寺の本堂・庫裏のあたりに金堂・講堂があたるものと推定されているに過ぎない。

昭和59年9月6日、金蔵寺より経蔵の老朽化・白アリ被害のためにこれを改築する旨の現状変更許可申請書が提出された。これに対して、文化庁から事前に発掘調査を実施して地下遺構の存在を確認するよう通知があったため、金蔵寺と協議を行い、昭和60年3月25日～5月29日の間建設予定地内の調査を実施した。この調査では、塔跡の土壇と推定されていた地点から塔の地覆石にあたると思われる磚列が確認されたため、当初の建設予定地を変更して許可が出された。調査面積は146㎡である。なお、文化庁からは石見国分寺跡の本格的な調査が行われておらず、保存及び活用上の大きな支障となっていることから調査を推進するよう通知があった。

これを受けて、昭和61年度には、国庫補助事業として寺域確認を目的に石見国分寺跡の最東端と考えられる地点を選定して昭和61年8月4日～8月23日にかけて発掘調査を実施した。寺域は確認できなかったが、寺域の東限と思われていたところに当時の建物跡が存在することを確認した。調査面積は92㎡である。

昭和62年度は一時中断したものの、昭和63年度に再度寺域の確認を目的に国庫補助事業を受けて昭和63年11月7日～12月14日の間発掘調査を実施した。寺域の確認はできなかったが、溝状遺構とともに誕生釈迦仏立像が確認された。調査面積は141㎡である。

本概報では、昭和60年3月～5月に実施した現状変更に伴う調査を第1次調査とし、昭和61年度及び昭和63年度に実施した調査をそれぞれ第2次調査・第3次調査とした。

2. 調査体制

調査は次の体制で実施した。

第1次調査（昭和60年3月25日～5月29日）

調査主体	浜田市教育委員会	教育長 半田 淳
調査指導	島根県教育委員会文化課	
調査担当者	桑原 韶一（島根県文化財保護指導委員）	
調査員	的場 幸雄（島根県文化財保護指導委員）	

調査補助員 川口幸子（臨時職員）
新谷勝幸（臨時職員）

事務局 浜田市教育委員会社会教育課
社会教育課長 宮田金吾～横田 勘
社会教育係長 竹中弘忠
主任主事 向田 薫

第2次調査（昭和61年8月4日～8月23日）

調査主体 浜田市教育委員会 教育長 半田 淳
調査指導 島根県教育委員会文化課
調査担当者 桑原新一（島根県文化財保護指導委員）
調査員 的場幸雄（島根県文化財保護指導委員）
調査補助員 後藤和正（別府大学学生）
伊藤克己（鳥根大学学生）

事務局 浜田市教育委員会社会教育課
社会教育課長 横田 勘
社会教育係長 沖野邦男
主任主事 向田 薫

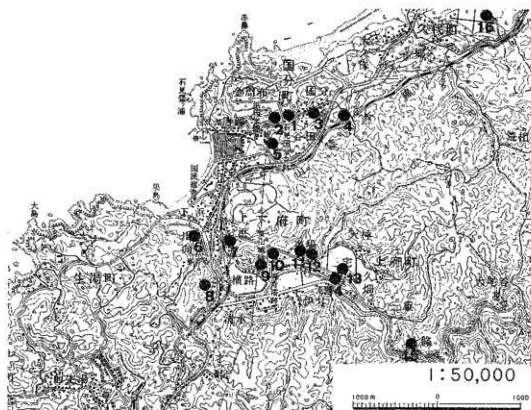
第3次調査（昭和63年11月7日～12月14日）

調査主体 浜田市教育委員会 教育長 半田 淳
調査指導 山本 清（鳥根大学名誉教授）
島根県教育委員会文化課
調査担当者 桑原新一（島根県文化財保護指導委員）
調査員 的場幸雄（島根県文化財保護指導委員）
調査補助員 原 裕司（嘱託職員）
遺物整理員 森山由美子（臨時職員）

事務局 浜田市教育委員会社会教育課
社会教育課長 飯泉 清次
社会教育係長 沖野邦男
主事 斗光秀基

II 位置と歴史的環境

石見国分寺跡は、島根県浜田市国分町1527番地外に所在し、古代石見国と呼ばれた島根県西部のほぼ中央に位置する。石見国は中国山地から派生する山々が海までせまり、大小の河川は急峻な山々を縫うように北西方向に流れて日本海に注ぐ。その途中でわずかばかりの河岸段丘を形成させるとともに河口には沖積平野を形成する。国分寺跡の所在する下府川下流も河口から約3.3 km、幅約500 mの蛇行した沖積平野が広がり、海岸は偽砂丘が発達している。国分寺跡は日本海岸に形成された偽砂丘地の北側丘陵上に位置する。丘陵は標高50 m～60 mの台地状の地形を呈し、その先



第1図 周辺遺跡位置図

1. 石見国分寺跡
2. 石見国分寺瓦窯跡
3. 石見国分尼寺跡
4. 奈古田窯跡
5. 浜田ろう学校敷地古墳
6. 川向遺跡
7. 伊甘神社脇遺跡
8. 中ノ古墳
9. 笹山城跡
10. 下府橋寺跡
11. 半場口古墳群
12. 片山古墳
13. 上府遺跡
14. 宮老山遺跡
15. 上条遺跡

端は日本海に突き出して国指定天然記念物である石見豊ヶ浦を形成している。比高差は谷が深く入り込んでいるため関分寺跡付近で約20m程度である。関分寺跡付近の地形は東側から西側へ延びる尾根と南側へ延びる尾根とが分岐する基部にあたり、また北側も台形状に丘陵が張り出して、標高52m～54mの平坦地を形成している。

この下府川下流の沖積平野は国府や関分二寺が所在する石見国の中心地であるが、遺跡確認数が少なく、研究は大きく立ち後れている。国府についても幾つか候補地が上げられ、昭和52年度～昭和54年度にかけて下府町横道地区、伊甘神社脇遺跡、上府町二宅地区で試掘調査が実施されたが所在地を確認するまでには至っていない。以下、主な遺跡について触れておく。なお、現在までのところ、この流域で先土器・縄文時代の遺跡は知られていない。

6. 川向遺跡 下府川河口に近い自然堤防上に位置する複合遺跡である。広範囲にわたって遺物が採集され、弥生時代中期～終末の土器及び須恵器や土師質土器、環状石斧等がある。

7. 伊甘神社脇遺跡 下府川左岸、川向遺跡の東南に位置する複合遺跡である。昭和53年に石見国府推定地調査に伴って調査が実施された。遺構としては古墳時代中期の祭祀土壌が確認されているほか、ピット群が認められている。遺物は弥生時代中期～奈良時代のもので、なかには瓦が含まれている。瓦は関分寺跡出土と同類のものと、下府院寺跡出土と同類のものが出土している。なお伊甘神社は式内社であるが本来別の地にあったとも伝えられている。

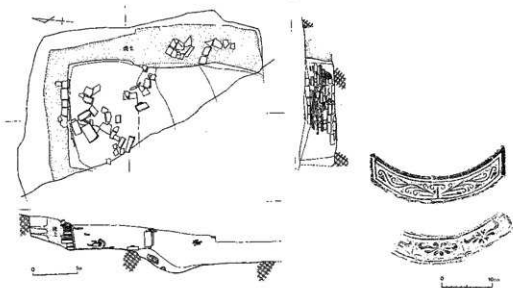
15. 上条遺跡 沖積平野の最奥に位置する遺跡である。大正末に丘陵中腹を採土中偶然2個体分の銅鐸が発見されている。銅鐸はほぼ完形のものとして上部を残す残欠であり、ともに扁平紐式の装袷禪文銅鐸である。ほぼ完形のものは総高推定28cmである。

12. 片山古墳 沖積平野の北側丘陵中腹に位置する。西側約350mに下府院寺跡が所在する。墳丘は墳形・規模とも判然としなが、丘陵側を切削した一辺11mの方墳と考えられる。石室は長さ6.2m、幅1.7m、高さ約1.5mの無袖型の横穴式石室をもち、腰石の一部に切石を使用している。

10. 下府院寺跡 沖積平野の北側の微高地に位置し、北側と西側は丘陵によって阻まれている。調査が実施されておらず実態は明らかにされていない。北側丘陵麓から南側20mの位置に塔の土壌が残され、上面には心礎と礎石が現存する。心礎は2.4m×1.3mの切石中央に直径84.5cm、深さ7cmの円柱孔があり、さらにその中に直径21cmの舍利孔がある。関分二寺に先立つ石見で最も古い寺院跡とされている。

3. 石見関分尼寺跡 関分寺跡から東側約350m離れた同丘陵上に位置する。現在曹洞宗東光山関分寺が所在し、礎石が転用されている。地名に「比丘尼所」「尼所」が残されている。調査が実施されておらず実態は明かでない。

2. 石見関分寺瓦窯跡 関分寺跡から南西側約100m離れた同丘陵上に位置する。昭和41年農地



第3図 石見国分寺瓦窯跡 (内田「島根生産遺跡分布調査報告書Ⅲ」)

改良事業によって発見された。工事によって焚口南側付近が失われたが、緊急調査が実施され県指定史跡として保存されている。窯の構造は半地下式の無状式平窯で、焼成室より60cm燃焼室を下げその間にU字形に掘りくぼめた段がある。窯の推定全長5m、焼成室の幅2.4mである。出土した軒半瓦は均整荷草文を配するものを窯の構築材として使用し、蓮華文を配するものを焼成していた。

4. 奈古田窯跡 国分寺跡から東側約730m離れた同丘陵斜面に位置する須恵器窯である。私道造成中に発見されたもので、窯の中心部分は畑によって破壊されているものと考えられる。時期は7世紀から8世紀と考えられている。

註

- (1) 島根県教育委員会「石見国府推定地調査報告Ⅰ」 昭和53年
- (2) 島根県教育委員会「石見国府推定地調査報告Ⅱ」 昭和54年
- (3) 島根県教育委員会「石見国府推定地調査報告Ⅲ」 昭和55年
- (4) 前掲註2
- (5) 直信信夫「石見上府村発見銅鐸の出土状態」『考古学雑誌』 22-2
- (6) 島根県教育委員会「島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ」 昭和61年
- (7) 山本清監修「さんいん古代史の周辺」(下) 昭和55年

III 石見国分寺跡の概要

石見国分寺に関する文献資料は、管見の限りでは『延喜式』に「石見国……国分寺料二万束」の記載が見られるほか、『続日本紀』の天平勝宝8年(756年)12月己亥の項に石見国分寺を含む26国に仏具等の下賜された記載があるのみで、当時の国分寺の状況を示す資料には恵まれていない。

ところで、石見国分寺跡には浄土真宗松林山金蔵寺が所在する。金蔵寺の創建公認は、寛文5年(1665年)に關基西玄が、すでに堂宇が建つほかは畑地となっていたこの地を買い上げたことに始まる。なお、堂宇には薬師如来をはじめ勧願等が安置されていたという。これら金蔵寺と石見国分寺の関係については朝枝誓実氏、野津左馬之助氏が金蔵寺所蔵古文書を引用してかなり詳細に言及している。

このように当地は早くから国分寺跡として知られ、大正10年3月3日には国指定史跡として保存措置がとられるなど多くの関心を集めてきたが、調査の遅れからその実態は明らかにされていない。大正14年、野津左馬之助氏は、承和年間に石見国鹿足郡を新設したことに伴い国分寺・国府ともに国摩郡仁万郷より移転し、国分寺は地形の制約から左側の塔と南大門を略した薬師寺式をなすものとされた。これに対して山本清氏は国府は当初から下府川下流域(上府町)にあり、国分寺については実測調査の結果、南大門を設けることも可能と考えられ、出雲国分寺跡に似た伽藍配置を想定している。また、規模については出雲国分寺跡よりやや小さかったものと考えられている。

近年の石見国分寺出土瓦については、内田律雄氏がこれまでに採集されている瓦を集成・分類しているほか石見国分寺瓦窯跡出土瓦の検討を行い、前島己基氏は山陰の軒瓦を整理するなかで石見国分寺出土瓦について検討されている。

註

- (1) 朝枝誓実『金蔵寺山緒書』大正8年
- (2) 野津左馬之助『島根県史』五 大正14年
- (3) 前掲註(2)
- (4) 山本清「第六節 仏教」『新修島根県史』通史編・昭和34年
- (5) 内田律雄「石見国分寺瓦について」『山陰考古学の諸問題』昭和61年 「石見国分寺瓦窯跡」『島根県生産遺跡分布調査報告書』III 島根県教育委員会 昭和60年
- (6) 前島己基「山陰における初期造寺活動の一側面」『山陰考古学の諸問題』昭和61年

IV 調査の概要

石見国分寺跡はその中心を金蔵寺が占め、その西側は農地改良によって削平されていることから現状変更に伴う第1次調査（第1～6調査区）を除く第2次調査（第7～11調査区）・3次調査（第12～18調査区）は金蔵寺の東側を中心に寺域確認を目的として実施している。昭和60年度から63年度までの3次にわたる調査では調査区18ヶ所を設けて塔跡基壇の北西各縁及び溝状遺構・落ち込み状遺構・ピットを確認している。以下各調査区の概要を述べることにしたい。

第1調査区（第6図）

塔跡の西側に東西8m、南北8.5mのグリッドを設定し、6分割して1～6区とした。層序は、表土層、茶褐色砂質層、灰色砂質層であり、地山までわずか12～16cmである。最下層の灰色砂質土中からは大量の瓦とともに寛永通宝や磁器が出土している。

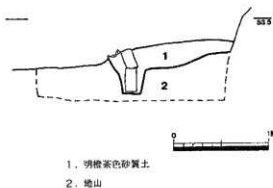
遺構については1・2区で磚列を確認した。これは塔跡東側に残されている4つの礎石の主軸線と平行し、真北方向を指しているため塔基壇を構成する地覆石にあたるものと考えられる。磚は幅約14cm、深さ約15～20cmの溝のなかに立て据えられており、28cm×41cm、厚さ7cmの磚を横長にして使用している（第4図）。この他の遺構としては、4区からピット2が確認されており、その埋土からは底部に回転糸切りを残す土師質土器片が出土している。また、3・4・5区では2本の溝を確認している。3区では溝に伴う石列縁から江戸時代以降と思われる磁器が出土しており、近世以降の遺構と考えられる。

第2調査区（第6図）

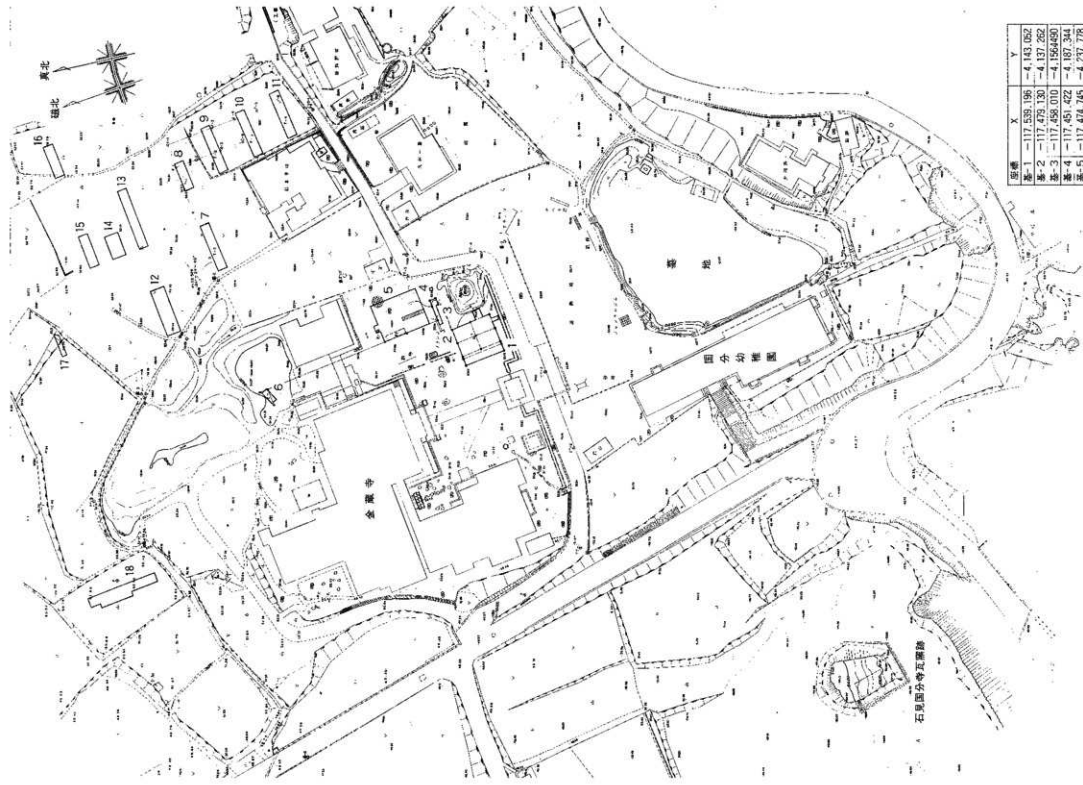
後世の削平を受けており遺構、遺物は確認されなかった。

第3調査区（第6図）

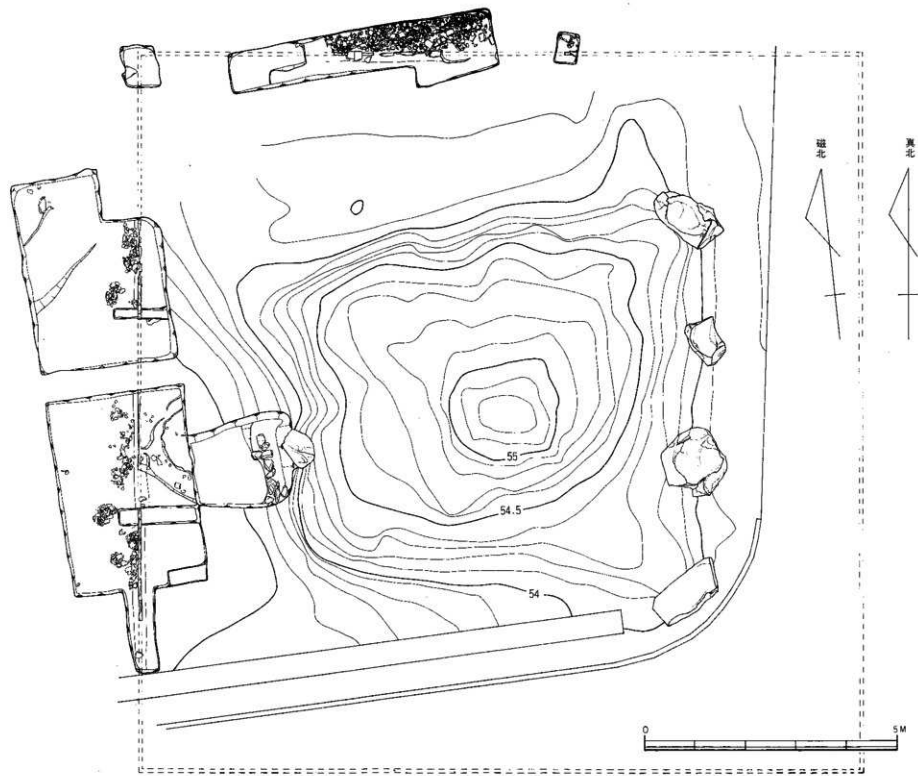
塔跡西側で磚列が確認されたため、その北側に東西1m、南北5.2mのトレンチを設定し、磚列を確認した。磚は第1調査区と同大のものを横長に使用し、比較的残存状況は良好であった。磚の据え方は地山を25cm垂直に切り落とし、磚列北側に平坦に削平してレベルを下げ、磚を立て据えている。尚サ



第4図 第1調査区磚断面図



第5圖 石家莊大學附屬單位圖



第6图 塔跡実測图

イドには橙褐色砂質土が観察され、磚を固定させたものと考えられる。また、立て掘えられた磚の上に北側へ1cm程度張り出して置かれた磚も3個体確認している。なお、磚列北側では第4・5調査区へ広がる瓦溜りを確認している。

第4調査区 (第6図)

第3調査区の東側に設定したトレンチで、磚列とその北側から瓦溜りを確認した。

第5調査区 (第9図)

塔跡の北側に東西8m、南北10mのグリットを設定し、4分割して1～4区とした。全体的に見られる層は最上層の茶褐色砂質土であり、セクションの大部分を占めている。この層の最下部からは昭和24年製造の1円玉が出土している。

確認した遺構はピット群、溝及び瓦溜りである。ピットは3・4区に集中して18、1・2区からは各1確認されたが、建物が建つか否かについては明らかにし得なかった。ピットの埋土中からは瓦片をはじめP6からは須恵器片、P16からは底部に回転糸切りを残す土師質土器片が出土している。溝については2区の中央の溝最下部から石見瓦が出土している。

第6調査区

塔跡の北側43mの林の中に礎石と思われる石があるため、ここに東西3m、南北1.3mのトレンチを設定したが、原位置を保つものではなく、遺構も確認されなかった。遺物は多量の瓦片のほか底部に回転糸切りを残す土師質土器片、始刀石斧欠損品1が出土している。

第7調査区

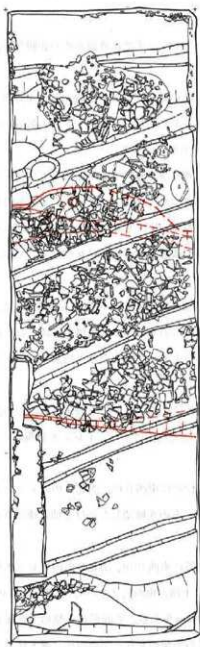
金藏寺東側に東西10m、南北2mのトレンチを設定した。この調査区は都合により十分な調査を行えなかった。地表面から86cmで地山に至り、トレンチ北西隅に落込みが見られる。

第8調査区

金藏寺東側、丘陵平坦部縁付近に東西6m、南北2mのトレンチを設定した。確認した遺構は第13調査区で確認された溝に続くものを確認しただけで他は確認されなかった。

第9調査区 (第8図)

第8調査区の南側6mの位置に東西10m、南北2mのトレンチを設定した。確認した遺構は土壌1、ピット10である。土壌は上端の東西長2.75m、底部で2.3m、上端の南北最大長1.35m、底部で1.25mであり、深さは38cmを測る。平面形は不整形で底部も若干の凹凸が認められる。この土壌からは軒丸・軒平瓦を含む多量の瓦片と須恵器片(蓋・坏・壺・皿)、土師器片(甕)のほか陶磁器片(白磁染付皿等)が出土している。このうち陶磁器片はいずれも16世紀から17世紀にかけてのものと考えられる。ピットについては明らかに柱穴と考えられるものが認められるが、建物が建つか否かについて明らかにし得なかった。



- | | | |
|---------------------|-------------|----------------------|
| 1 灰褐色土(耕作土) | 11 灰 | 21 赤褐色粘質土(赤褐色砂質土) |
| 2 粘土色土 | 12 細かい紫色砂質土 | 22 暗褐色粘質土 |
| 3 黒褐色土(黄褐色ブロックを含む) | 13 暗褐色土 | 23 黄灰色粘質土(少量の砂を含む) |
| 4 黒褐色土(灰を含む) | 14 灰黄褐色粘質土 | 24 赤味を帯びる黄褐色粘質土 |
| 5 黒褐色土(黄褐色土ブロックを含む) | 15 明黄褐色粘質土 | 25 黄灰色粘質土 |
| 6 黒褐色土 | 16 黄褐色粘質土 | 26 黄灰色粘質土(細小ブロックを含む) |
| 7 褐色粘質土(灰を含む) | 17 明黄褐色砂質土 | 27 地山 |
| 8 黄褐色粘質土(細小ブロックを含む) | 18 紫色砂質土 | |
| 9 暗褐色土(粘土) | 19 淡黄褐色粘質土 | |
| 10 灰褐色粘質土 | 20 暗灰色粘質土 | |



○ 仏像出土位置

第7図 第12調査区遺構実測図

第10調査区（第8図）

第9調査区の南側6mの位置に東西10m、南北2mのトレンチを設定した。確認した遺構は土壌2、ピット9である。2つの土壌は調査区東側で確認され、北側の土壌は上端の東西長1.1m、南北長1.2m、深さ30cmを測る。調査区南東隅で確認した土壌は上端の東西長90cm以上、南北長80cmを測り、深さは14cmと浅い。ともに土壌内からは瓦片が出土している。ピットについては第9調査区同様柱穴として考えても差し支えないものが認められる。

第11調査区（第8図）

第10調査区の南側6mの位置に東西10m、南北2mのトレンチを設定した。確認した遺構は土壌1、ピット7である。土壌は上端の東西長1.1m、南北60cm以上で深さは11cmと非常に浅い。土壌内からは瓦片が出土している。ピットについては第9・10調査区と同様柱穴と考えられるものが認められる。

第12調査区（第7図）

金蔵寺東側に設定した調査区のみで金蔵寺に最も近い位置に東西10m、南北3mのトレンチを設定し、溝状遺構1、落ち込み状遺構1、溝2、小溝6を確認した。

溝状遺構は調査区中央ではほぼ南北へ伸びる状況で確認され、落ち込み状遺構とは整地層と考えられる層を挟んで重なっている。上端幅3.4mで、底部は丸味を帯びた断面を呈し、深さ45cmを測る。両壁は24cm～30cmまで切り落としている。確認面から底部まで4層あり、下から炭層、灰褐色粘質土層、皮層、暗赤褐色土層となっており、下層の炭層は薄く、上層の炭層は2～8cm程度で層中より釘状の鉄製品が出土している。暗赤褐色は焼土と考えられ、層中からは回転系切りを残す土師質土器や多量の瓦片をはじめ、銅製品の小片5点と銅造薬牛釈迦仏立像1軀も含まれていた。

落ち込み状遺構は調査区中央から西側、東西方向で7m以上広がるもので、地山面から掘り込まれたものと考えられる。深さは50cmを測り、底部は平坦である。この遺構はサブトレンチでの確認であり、広がりや性格等確認することができなかったが、埋土中には瓦片や須恵器片が含まれていた。

小溝は北西-南東方向に約1.5m間隔で並走している。幅は20cm～40cm、深さ10cm程度で、右見焼が出土する溝2とも切っている。小溝は第13～15調査区西側においても確認されている。

第13調査区

第7調査区と第8調査区との間の未調査部分を確認するため、その北側に東西13m、南北2mのトレンチを設定した。確認した遺構は溝3、小溝4、ピット3である。

ピット3は調査区東側で確認した。調査区南側で確認されたピットを囲む窪地と北側壁部分の窪地の埋土（赤灰色土）には炭化物と瓦片を含み、南側壁の窪地からは回転系切りを残す土師質土器

片も出土している。溝、小溝についてはともに北西—南東方向に伸びて第12調査区の小溝と並走する。溝からは石見焼が出土し、なかには石列を設けるものもある。小溝は溝の西側で確認されるが東側では確認することができない。

第14調査区

第13調査区で確認した溝に不明確な点があったため、その北側に東西5m、南北3mのトレンチを設定したが、溝底部より陶器が出土した。なお、ビット1を確認した。

第15調査区

第14調査区と同じ目的で東西7m、南北2mのトレンチを設定し、溝2、小溝1を確認したほか窪地から瓦片、須恵器片が出土した。

第16調査区

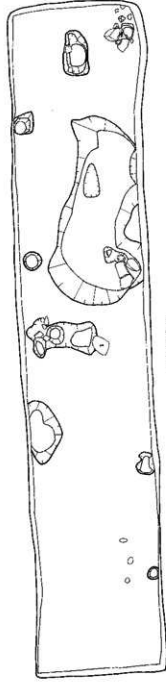
本調査で最も東側に位置するもので、東西5m、南北2mのトレンチを設定した。確認した遺構は掘立柱建物1、溝1、ビット1である。掘立柱建物は調査面積が狭かったためその規模は明かではないが、ビット内から榦鉢が出土している。溝からは瓦片と石見焼がともに出土している。

第17調査区

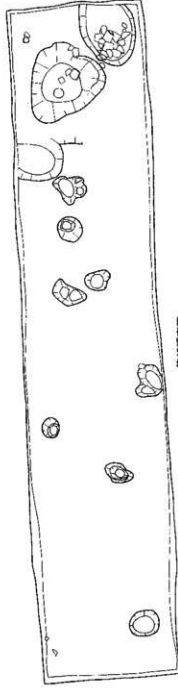
第12調査区の溝状遺構を確認するために北側21mの位置に東西5m、南北1mのトレンチを設定したが、遺構を確認できなかった。遺物は瓦片と蛤刀石斧欠損品1が出土した。

第18調査区（第9図）

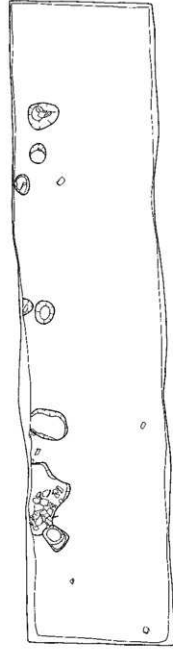
北側の寺城を確認するために東西2m、南北15mのトレンチを設定したが、ビットが確認されたため一部西側へ1m拡張した。確認した遺構は径20～25cm程度のビットを26確認した。そのうち14のビット内から瓦片が出土した。



第9号調査区



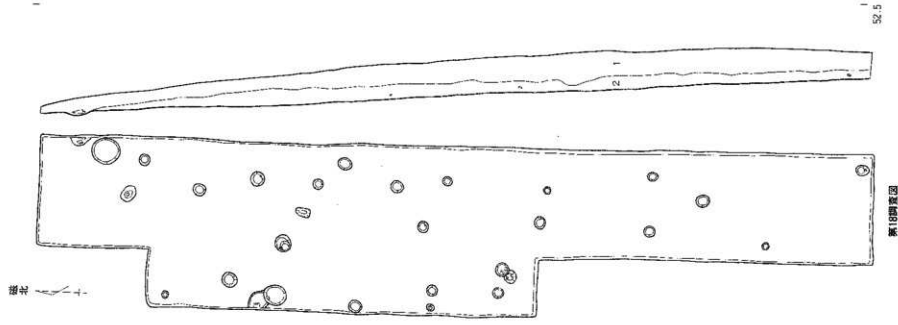
第10号調査区



第11号調査区



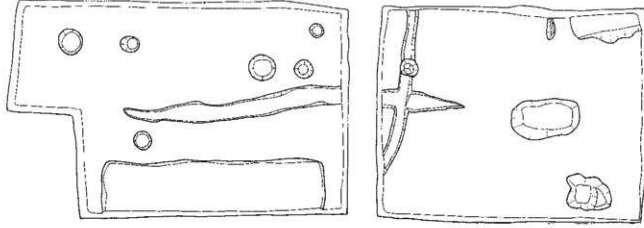
第8図 第9・10・11号調査区遺構平面図



50.5

第18調査区

北



第5調査区

1. 埋内土
2. 埋外土

第9区 第5・18調査区遺構実測図

V 出土遺物

3ヶ年にわたる調査によって得られた遺物はコンテナで約70箱である。その大半は瓦類であり、他には須恵器、土師器、土師質土器、磁器、陶器、銅製品、鉄器、石器などの各種である。遺物が集中して認められたのは、第2次調査で実施した第9調査区の土壌と第3次調査で実施した第12調査区の溝状遺構からであった。出土した遺物は整理段階であるため、以下主な遺物について述べることにしたい。

1. 瓦類

瓦はすべての調査区から出土をみたが、大半は第9調査区の土壌と第12調査区の溝状遺構から出土したものであり、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、甍斗瓦が出土している。このうち軒瓦は24点しか出土していない。

(1) 軒丸瓦 (第10図)

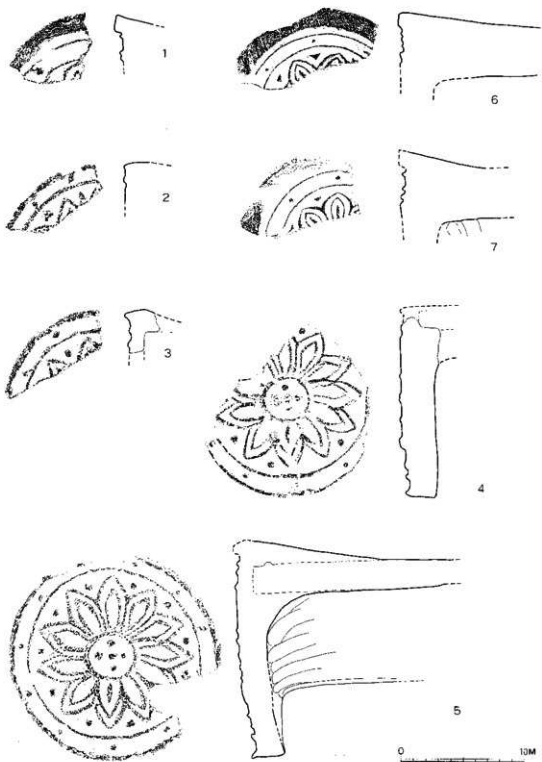
出土した軒丸瓦は11葉半弁蓮華文(2~5)と8葉半弁蓮華文(6・7)がみられる。1については焼成は良好であるが残存状況が悪く瓦当文様のはっきりとしない。弁端は丸く周縁に珠文がみられる。2・3は各弁の間に珠文を配し周縁の珠文と対応する。弁端は鋭くとがる。焼成は不良である。4・5は同范である。径は17.5cm、内区の径が13.7cmである。中房は平坦で、径は3.6cmである。蓮子は1~4である。弁端は鋭くとがり、各弁の間に珠文を配し、周縁にも珠文をめぐる。6は弁間が三角形を呈し、それに対応するように珠文がめぐる。周縁の幅は1.2cmで砂の移動が観察され、糸切痕の可能性もある。7は6の范とは異なるが同文と考えられる。

(2) 軒平瓦 (第11図)

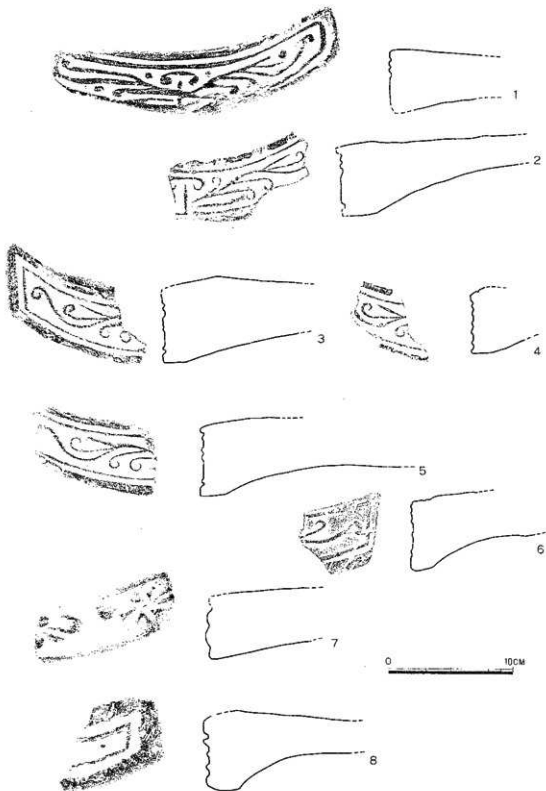
出土した軒平瓦は均整唐草文(1~6)と蓮華文(7)の他、瓦当文様の不明なもの(8)がみられる。1~6は同文であり、中心飾りはT字型の左右を下方へ巻き込んでいる。その左右には反転する藤手状の均整唐草文を配している。ただし、1は瓦当文様に退化がみられる。7は8弁蓮華文を3ヶ所に配する新羅系の軒平瓦である。園分寺跡では蓮華文と蓮華文との間に3葉文を配したのも採集されているが、7は風化が著しくはっきりしない。8は今回はじめて確認されたものである。范の彫りは深く凸縁の内側に珠文が配されている。園分寺に関連するか否かについては類例を待ちたい。

(3) 丸瓦 (第12図)

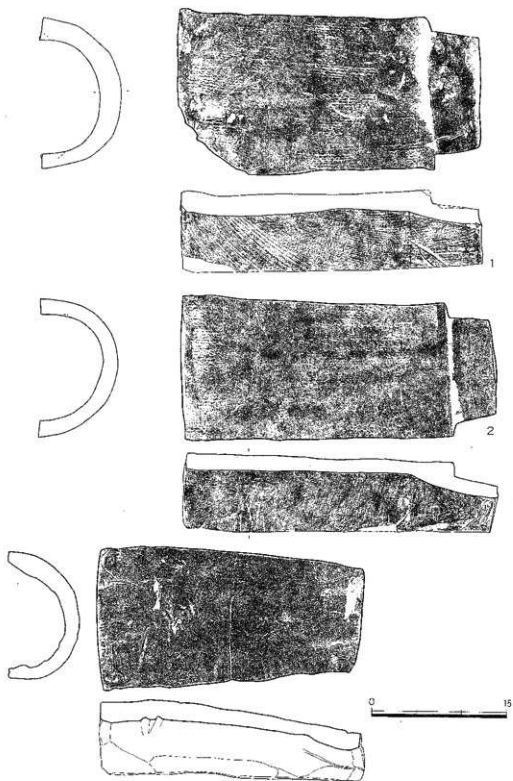
丸瓦は下縁式(1・2)と行基式(3)とがあり、前者が多い。1・2はともに凸面に側縁に平行な縄印きを施し、それをナデ調整している。凹面は糸切痕と布目痕が残る。1は長さ33cm、広端



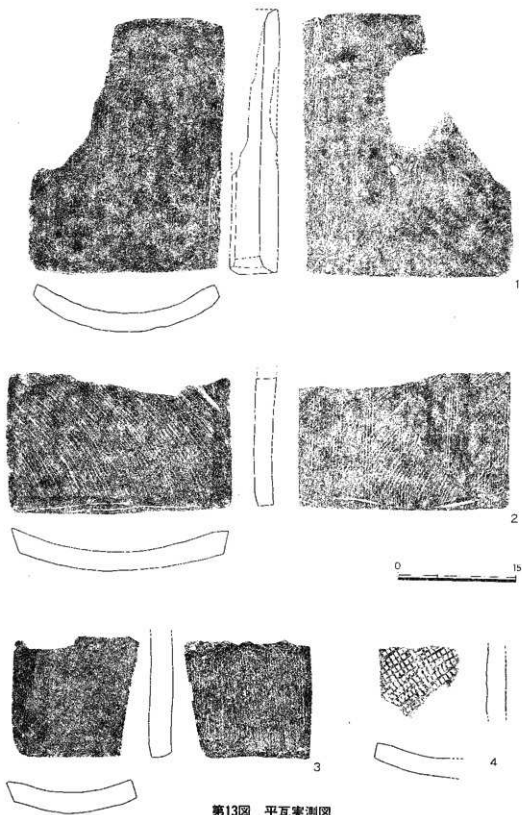
第10图 軒瓦瓦突測図



第11图 軒平瓦实例图



第12図 丸瓦実測図



第13圖 平瓦実測圖

幅18cm、2は長さ34cm、広端幅16cmである。3は長さ29cm、広端幅15.5cmで凸面はナデ調整がなされ、凹面は布目痕が残る。

(4) 平瓦 (第13図 1・2・4)

平瓦は凸面に側面に平行な縄叩きを施すが糸切痕が残るものもみられ、凹面は糸切痕と布目痕が残る。1・2とも凸面に離れ砂がみられる。3は格子叩きの平瓦であり、隅分寺跡ではこの1点しか確認されていない。

(5) 瓦道具 (第13図 3)

瓦道具として鬘斗瓦を1点確認している。凸面は側面に平行な縄叩きを施し離れ砂がみられる。凹面は布目痕跡が残る。

2. 土器類

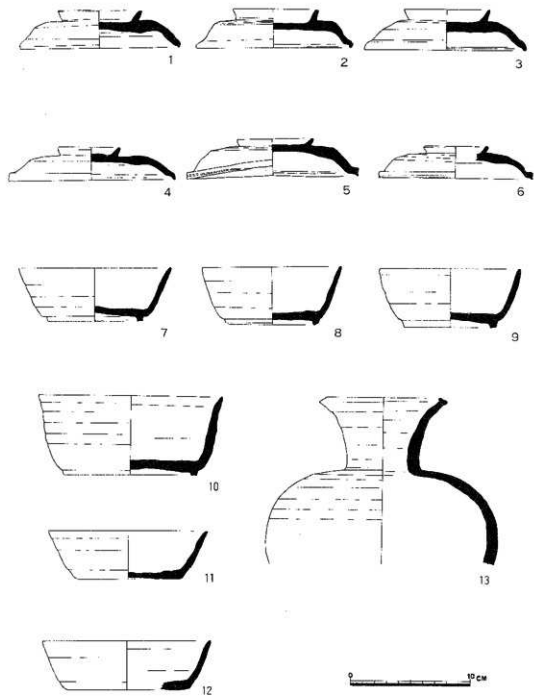
出土した土器類は量的に多いものではないが、第9調査区の上層と第12調査区の溝状遺構でまとめて出土している。以下、出土遺構別に主なものを述べておく。

(1) 第9調査区土壌出土 (第14図・第15図 1～5)

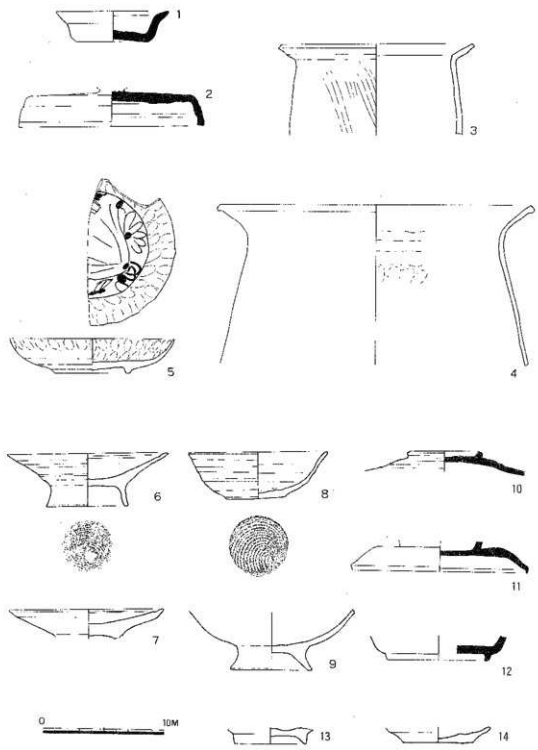
第14図1～6及び第15図2は須恵器蓋である。蓋には輪状つまみを有するものと宝珠つまみを有するものがみられるが、宝珠つまみ (第15図2) については蓋の蓋と考えると差し支えないものである。輪状つまみ (第14図1～6) は天井部の切り離しをへら起こして行い、口径13～14.4cm、器高2.7～3.5cmで比較的低い作りである。口縁端部の作りは外面が丸く接地するものと外面に稜のつくものがある。また、天井部と体部との境に明確なアクセントを付けるものとそうでないものが存在する。第14図7～12は須恵器坏である。坏は低く直立する高台を有するもの (7～10) と有さないもの (11・12) がある。大は口径14.5cm、器高6.5cm、小は口径11.7cm、器高4.7cmのものまで存在する。体部はあまり開かないものが多く、切り離しはへら起こしである。第14図13は須恵器壺である。第15図1は須恵器皿である。口径4.6cm、器高2.4cmで、口縁は「く」の字に外方へ屈曲する。底部は回転糸切りを残す。第15図3・4の土師器甕である。3は外面に荒いハケ目を施し、内面及び4は風化が著しく調整は明らかでない。第15図5は白磁染付皿である。内外面は指圧による文様を付している。

(2) 第12調査区溝状遺構出土 (第15図 6～9)

6・7は土師質土器の台付皿である。体部は直線的に開き、口縁内側に沈線をめぐらす。底部には回転糸切りを残す。台は高く、直線的に開く。6は口径13.3cm、器高4.5cmである。8は土師質土器の坏である。体部はやや内湾ぎみに上がって、中ほどから直線的に開く。底部には回転糸切りを残す。口径は11.5cm、器高は3.9cmである。9は土師質土器の碗である。体部は大きく内湾



第14图 土器实测图(1)



第15图 土器実測图(2)

ぎみに開く。高台は体部に比べ小さく、「八」字状に開いている。

(3) 第12調査区落ち込み状遺構出土(第15図 10~12)

10・11は須恵器蓋である。ともに輪状つまみを有している。11の内面には使用痕が認められる。

12は須恵器坏である。

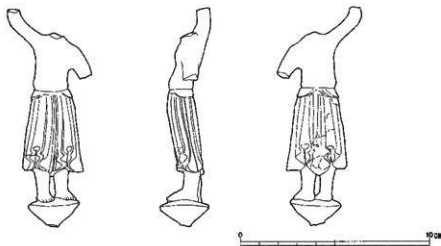
(4) 第13調査区南側窪地出土(第15図 13・14)

13・14とも土師質土器の坏である。13は高台を有する。ともに調整は風化が著しく明らかではない。

3. 銅造誕生釈迦仏立像について

第12調査区の溝状遺構内から出土した銅造誕生釈迦仏立像は、蠟型による一騎ムク像である。右手を上上げて左手を垂下し、両足は少し左右に間隔をあけて鉢型の蓮肉上に立つ。下半身には裳をまとっている。頭部は頸の付け根より欠失し、右腕は上膊部で欠失、左腕は上膊部なかほどより欠失している。足下の蓮肉部に設けられた衲も付け根より欠失している。

この誕生釈迦仏は、蠟型技法を駆使して身体並びに着衣を写實的に表現している。ただし、裳の衣文の網さばきは様式化している。右手を上げ、そして左肩が少し下がるという表現、胸部(乳部)にふくらみをもたせて肉身部の表現に自然の抑揚を与えている。裳の衣文線は鋭く表現され、左右への広がりをとり、あわせて肉取りを薄くする。裳の上端の折り返しは小さく、しかも誇張が全くみられない。腹部で内側へ折り返して中に入れ、両側面及び背面では外側へ折り返している。足はやや太めで、しかも甲盛りをつくり、指先を丁寧にタガネで表出する。体全体に肉厚を控え反りをもたせる。しかも足の向きと体の向きにズレがあり、やや体軀にひねりがみられる。また、右の裳



第16図 銅造誕生釈迦仏立像実測図

裾を少し上げるなど極めて自然な動きのある体形を作り出している。

察するところ、かなり高度の火中を経過している。鍍金の有無については確かめがたい。また、頭部には三道は刻まれていなかったものと考えられる。

鑄造は裳裾のあたりに「ス」が集中してみられることから蓮肉部を上にし、衿を湯口にしたものと考えられる。鑄ざらえ、キサゲの作業は丁寧であり、鍍金があった可能性もある。

今回出土した誕生釈迦仏は、鑄上がりも優れ、姿形の造形も優れており、7世紀後半の誕生釈迦仏として、これだけ動きのみられる像もめずらしい。岡分寺成立以前の像であるが石見岡分寺において用いられたものと考えられる。山陰の初期仏教文化の歴史的背景、石見岡分寺の歴史を考える上で貴重である。

VI まとめ

石見岡分寺は昭和60年にはじめて調査が実施されて以来、3次にわたる調査が実施されたが、伽藍及び寺域に関連した具体的な遺構は塔跡を除いて明らかにし得なかった。しかし、断片的ではあるが、それまで知られなかった新たな知見も得ることもできた。以下、整理して述べておきたい。

(1) 第1・2調査区で確認した磚列は横長の磚を立て据え、その上に寝かせた磚を1cm程度外側へ張り出させて置くことから塔基壇の地覆石にあたるものと考えられ、塔跡の北西各縁を確認したことになる。また、塔跡東側に残る4つの礎石が真北方向に並び、塔跡西側に残る礎石も含めた5つの礎石とも上向の標高が54.2m±4cmであることからほぼ原位置を保っているものと考えられる。これを基準に塔跡の規模をある程度推定すれば、12~14mの基壇の上に約8m四方の塔が建っていたものと考えられる。

(2) 第12調査区で確認した落ち込み状遺構はセクションでしか確認することができず、今後の調査を待たなければならないが、その加工の規模から考えれば岡分寺を考える上で大きな手掛かりといえる。下層は自然堆積を示し、上層及び溝状遺構の掘り込み面までの間は不自然な堆積が観察できるとともに、出上する瓦片も層に偏りがみられることから溝状遺構以前に整地が行われたものと考えられる。

(3) 落ち込み状遺構の上方で確認された溝状遺構はその主軸を真北に指していることに注意しておきたい。遺構の両壁はともに切り落としているが西側壁に肩の崩れた部分があり、廃棄方向を示している可能性もある。また、埋土中からは炭をはじめ火肌を呈した誕生釈迦仏立像が確認され、

第13調査区の産地においても土師質土器とともに炭化物が確認されていることから、どの程度の規模かは明らかではないが、国分寺が火災にあった可能性がある。その時期については誕生釈迦仏立像ともに出土した土師質土器が決定の判断材料となるであろう。

(4) 各調査区でピットが確認されたものの建物が建つか否かについては、明かにすることはできなかった。しかし、確認されたピットは第5調査区、第9～11調査区、第18調査区に集中していた。ピットの規模はいずれも直径20～30cm、深さ15～30cmと小さなものが目立つ。しかし、ピットの埋土中には瓦片をはじめ須恵器片、土器質土器片を含んでおり、石見国分寺が建立されていた時期のものと考えておきたい。

(5) 塔跡から南西約70m、農道から国分幼稚園に登る階段の切り通しに多くの瓦片が露出しており注意しておく必要があろう。

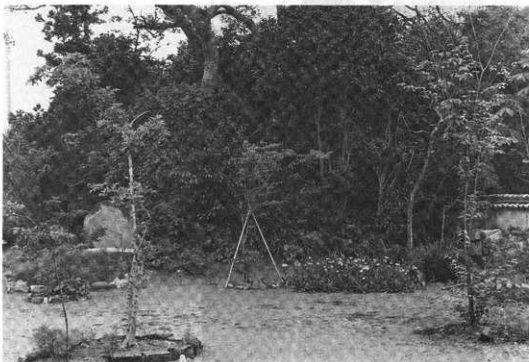
(6) 誕生釈迦仏立像はその様式から制作年代が7世紀後半と考えられ、石見国分寺の建立以前のものである。

(7) 石見国分寺以前の遺物としては鋸刀石斧の欠損品が出土しているだけであり、現在のところ土器類はみあたらない。

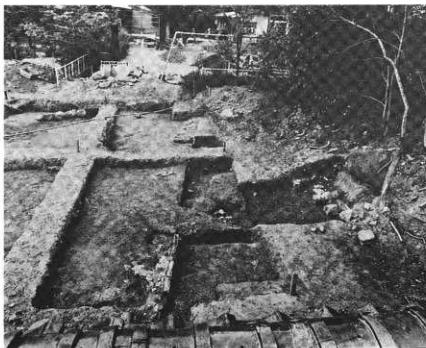
圖 版



1. 石見国分寺跡航空写真 (北西から)



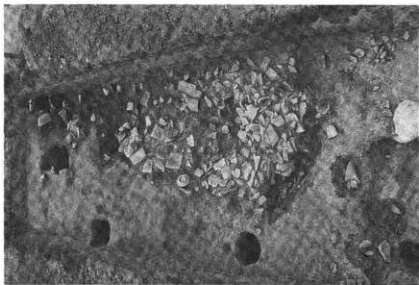
2. 塔跡近影



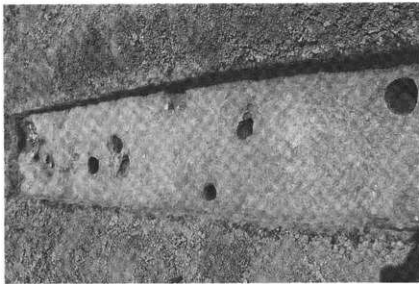
1. 塔跡西縁 (第1調査区)



2. 塔跡北縁 (第3調査区)



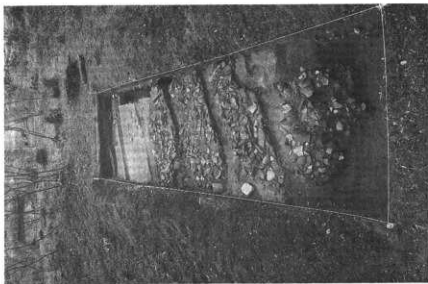
1. 第9调查区



2. 第10调查区



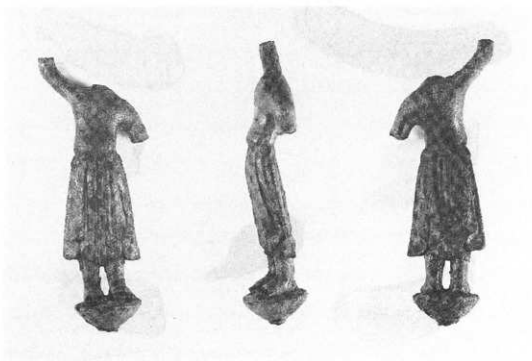
1. 第11調査区



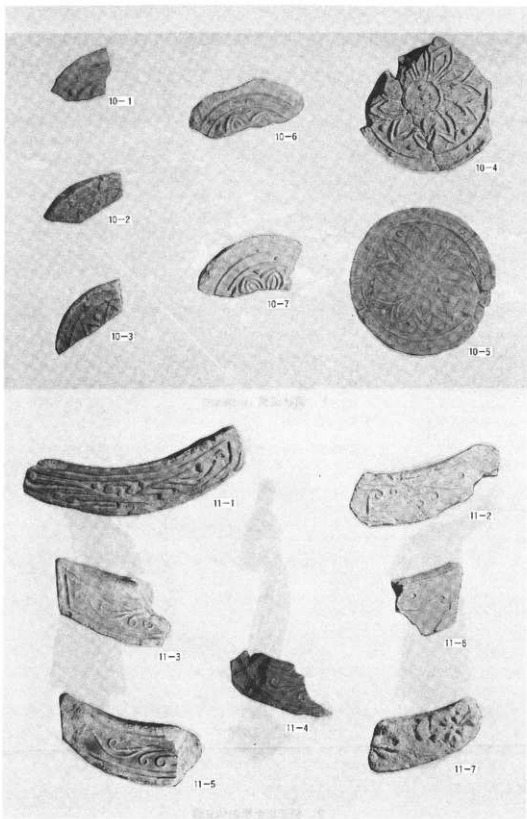
2. 第12調査区



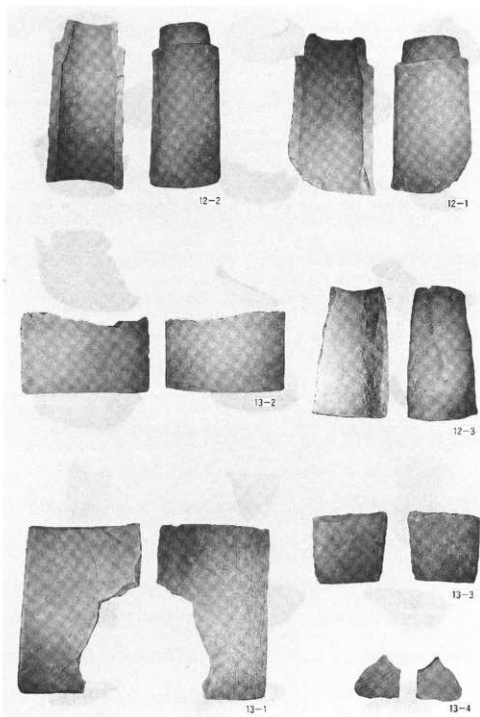
1. 溝状遺構 (第12調査区)



2. 銅造誕生釈迦仏立像



軒丸瓦・軒平瓦



丸瓦・平瓦

